文化

沈黙に向き合う
沖縄戦聞き取り47年

石原昌家〈78〉

依然不透明な検討過程

平和資料館問題

なぜ事実ひた隠し
与党からも執行部批判

県平和祈念資料館問題で与党からも県執行部への批判が出たことについて報じる1999年10月8日付の琉球新報朝刊

「平和祈念資料館問題」は、新聞報道によって展示改ざんを知った監修委員会が県担当部局を問い質す段階から、県議会が県執行部を追及する段階へと移行した。連載77回（2月19日付）で記したとおり、県政与党の自民党が監修委員会の議事録公開を県に求めたので、与野党がこぞって展示改ざんを糺す方向へ向かうことが期待できた。

あにはからんや、与野党が県議会での県執行部追及を前に、監修委員の私の行為をめぐって、与野党間に問題が発生するとは思いもよらないことだった。県議会開催に先立って、野党各派議員の皆さんが議会での質問のため、合同学習会を開催することになったようで、私が説明役に呼ばれた。

1999年3月、知事に提示した監修委員会で監修を終えた展示原案の膨大な資料をもとに、それまでの新聞報道で知る展示変更の問題点を伝えた。その関連でさらに、野党議員控室に県執行部に質問してほしい要点などを記したファクスを送信した。

平和祈念資料館問題⑪

展示変更、県三役関与
隠蔽姿勢、与党も批判

私としては、これまで琉球新報、沖縄タイムス両紙が、県の無断変更を暴いていった内容の元の原案だから、その資料開示は当然と思っていたので、8月11日琉球新報、沖縄タイムスの報道開始後、その資料を求めてくるメディアには躊躇なく提示していた一環だった。

不信感を謝罪

しかしながら、私が送信したファクスを自民党が入手し、野党議員にだけ情報を提示したのは不公平だと新聞で報じられるほど私の行為が問題視されていった。報道でそれを知った私はその間の経緯を弁明するため、単独で記者会見した上に、すべての監修委員会資料を自民党の皆さんに提示することを伝えた。

私は野党のような説明を求められていなかったので、全資料を自民党議員に面会して預けるつもりだった。ところが、会議室が準備され、自民党議員4人に監修委員会の宮城悦二郎会長代行が待機していて、その上に新聞記者やテレビカメラなどが待ち受けている、という物々しさに呆気にとられた。

「このような場面が設定されていると知っていたら、一人で1時間近く、今まで記者会見することもなかったのに」という私のつぶやきから始まったその場は、いきなり「なぜ、野党議員にだけ監修委員会資料を提示したのか」と、私への不公平、不信感むき出しの批判が始まった。「監修委員を辞めて責任をとるのか」という声も飛び出したが、それは筋が違うと思ったようで、翁長雄志議員（のちの沖縄県知事）がその声を制した。

私は「ライフワークの研究テーマは郷友会（同郷組織）であり、沖縄社会の特徴は各種選挙時に見られるので、特に伊是名島出身の儀間光男さんをはじめ自民党議員の皆さんから聞き取り調査をしてきている。宮古出身議員から〝熱気に包まれた僕の選挙事務所に張り付いて、郷友会員の候補者支援の仕方を直接観察（参与観察）したらいいですよ〟と言われるまで信頼されてきている。そこで自民党に不信感を持たれているというのは今後の私の研究にも支障を来すし、大変申し訳ない」と、不信感を与えたことに謝った。それでその場は収まった。

全資料を翁長氏に

直後、琉球新報の松永勝利記者が「すぐに謝ったのはいさぎ良かったですよ」という言葉をかけてくれた。石原批判の会が終わるや、「不公平」を無くすべく、私は自民党の議会質問に役立たせるようにと、一切合切の監修委員会資料をキャリーごと翁長雄志議員のもとに預けた。私は1週間ほど、監修委員会資料をすべて手放したのである。

元県議会議長だった同じ門中の喜納昌春氏が「僕が質問中に自民党議員の重鎮たちが、議会をゾロゾロ出ていったので自然休会になったが、石原さんに会うために出ていったのか、初めて知ったよ」と、述懐したのはつい3、4年ほど前、門中行事の場でのことである。

私は、自民党に不信感を与えた行為が、大事な議会の自然休会を招いたことまでは当時知らなかった。県上層部でもこの機に乗じ、知事選挙を争った大田知事時代の監修委員を交代させようという動きが水面下で模索されていたようだ。

だが、私としては県政与党の自民党に全資料を預け、展示改ざんがどれほどひどいかを確認してもらえる機会が生まれたことを喜んでいた。

真実の重み

9月30日、県議会が開会して間もなく、野党が資料館問題の質問に県執行部が終始誠意のない対応をしている、ということで審議拒否し、議会が空転した。紆余曲折を経て、10月6日からようやく県議会が正常化することになった。私が翁長議員に全資料を預けたのが功を奏したのか定かでないが、琉球新報の10月8日朝刊の解説記事に、「平和資料館問題／なぜ事実ひた隠し／与党からも執行部批判」（写真参照）という見出しを目にしたとき、新聞紙面に名指しで批判を受けてきたモヤモヤは一気に解消した。

その解説記事で「新県平和祈念資料館問題で、県は七日の文教厚生委員会で、稲嶺恵一知事ら県三役が展示内容変更の指示とも受け取られる発言をし、事実上見直しに関与したことを初めて認めた」と記されている。

また「八月十一日の報道以来、新たな事実が報じられる度に『検討過程の話』として、一貫して三役の関与を否定する態度を取り続けてきたが、ついに真実の重みに耐えられなくなった、というのが実態に近い。次々と伝えられる新事実に、自民党、県民の会、新進沖縄など県政与党からも、『事実を包み隠さず公表し、平和祈念資料館の在り方に対する稲嶺県政の姿勢を、堂々と県民に示すべきだ』『八月の時点で、きちっとした姿勢を示すべきだった』など、県執行部の対応に批判が高まった」と、いわば身内からもその対応が批判された。

次回、新事実の全容解明スクープ記事と資料館の位置づけを記す。

（次回は24日掲載）